

田の中の広い道を通ってレストハウスに帰るころ、途上同行数人の参拝に出あう同伴君。草を喰んでいる背瘤のある牛を撮るといって、あぜ路をとんでいったが、このインド特有の聖獣は、汝ら何をするかの風で悠然とレンズを横目でみていた。

朝食を喫するのも忙しく、一行は正式に大塔参拝にゆく。われわれ二人は途中にある国立小博物館に入る。その少し下の田のある所が、近く日本寺建立の予定地であるということも聞いた。

小高い博物館の庭からはるかに高く見える大塔の頂きもまた立派である。ここもやはり参観は無料、しかし清潔な陳列室が大小二つ、佛像五十二体という列品、小さな釈迦本生譚のレリーフとごく小さい銅仏像は、ちよつと心ひかれて見入ってしまった。眼鼻だちのキリつとした立ったひとりの若い看守君が大いに好意をもってカメラに入ってくれたこともうれしかった。

この博物館から車をつらねて大塔の北側の丘を通って少し家なみつづきの路を下ると、展望一変、左側は鬱蒼たるるゴヤの森林つづき、右は広いひろいニレンゼン河の大河原。しかし水は乾期なので細く一条の流れを見ているだけ、ほとんどわれわれ一行以外には人かげはなく、牛が水を飲んでいるだけという悠々たる天地。

河向こうに前正覚山が、日本の筑波山に似た形をして霞んでいた。仏教徒にとつて実に親しみぶかいこの山河が、こんなにブツダガヤのご近所にあるとは知らなかった。車から降りて三々五々、ハハアこれがその世尊六年の苦行をすてて沐浴をされた流れであり、霞んでいる山の石窟はかつての禪定の地。するとスジャータ長者の美しいお嬢さんが、おいしい乳糜を捧げたのは左側のゴヤの林の辺りかななどと、想像は二千五百年も前へ遡ってドラマのように展開する。

前正覚山石窟に現われた竜神は、痩せ衰えた世尊に成道の村を教え

た、という伝説はともかく、ここはブツダガヤに赴かれる途上挿話の聖跡である。われわれは世尊が歩まれた土の上を逆に通ってきたのである。写真を撮る——などということは全く忘却、茫然として瞳に映るものに感慨を催しているばかり。

ふと背後にはだしの足音、背丈の高い青年が静かに通りすぎた——アレッ！世尊とふりかえった——イヤコレハ ウソ。

さあ行きましよう、と運転手君を促したのです。というのは次は霊鷲山というのですから、ズーツとぶつ続けに感激のしどおしなのである。ブツダガヤの本来の地名、ガヤの街に出て午飯のものを買って疾走三時間、約三十里ほど走って、珍しく舗装のしてない村道のような路を、ホコリをあげて少し行くと霊鷲山の下に着く。予想外に低い山で、山というのも誇称に近いほどだがその山形は一万尺級の峻嶺を仰ぎ見るような巍然なる岩石の霊容、ふしぎな山であると思わざるを得ない。

今、車をおりたこの山麓周辺の緑林地帯は、たえず經典に出てくるマダカ国の旧都古昔の王舎城の地で、有名な五岳霊鷲山とともに他の四つの山々も屏風のように裾を接して並び立っているが、それらはすべて京都の東山のように、あれよりも低く柔かく、そして樹木がすっかり緑を着せて広がっているのに、この霊鷲山の頂きは一木一草もない峨々の姿、別に宗教徒でなくても何か異様なものが感ぜられない筈はない。

だがその登る径は、村道とちがって岩石を入れた良い舗装で勾配も緩く登りよいし一歩登れば一歩登るごとに展望はひろがってゆく。しかもこの一条の山道は、マカダ国のビンバシヤラ王が、釈尊の説教聴聞のために作ったままのものだという。そして途中二ヶ所古いレンガの礎が遺っているのも、王が塔を建てた跡だという揭示があったり、またその反対側の路傍に、釈尊のいとこの秀才ダイバダッタが、釈尊の盛名をねたみ石を投げて負傷させた所と札が立っている。事実またその辺りは今でも石ころだらけである。

(つづく)